

## マタイ福音書10章 (9:35-11:1) の編集構造を分析

- イエスの権威ある教えと力あるわざの段落 4:18-11:1の中での位置付け
  - 4:18-7:29 山上の説教 - モーセの教え
  - 8:1-34 力あるわざ (病を癒し悪霊を追い出す) - エリヤ、エリシャの奇跡のわざ
  - 9:1-34 力あるわざ (病を癒し悪霊を追い出す) - エリヤ、エリシャの奇跡のわざ
  - 9:35-11:1 弟子を遣わす説教- ヨシュアの働き
- 9:35-11:1 弟子を遣わす説教- ヨシュアの働きの概略
  - 9:35-10:5a 12弟子に権威を授けて命じる
  - 弟子を遣わす教え
    - A) 10:5b-15
    - B) 10:16-23
    - C) 10:24-33
    - D) 10:34-42
  - 11:1 12弟子に命じ終える
- 天の御国が近づいた = さばきの日 10:15, 最後に人の子が来る 10:22-23
  - 悔い改めなさい B) C) 強くあれ、恐るな ヨシュア1:5-9
    - 迫害の中で雄々しく語れ、恐れなくて語れ
  - 天の御国が来る A) D) 主がともに栄える ヨシュア1:8-9
    - ふさわしい者に平和と報い (マタイ25:34, 46)
- あなたがたは地の塩 C) D) あなたがたは世の光 A) C)
  - 義のために迫害されている者は幸いです。天の御国はその人たちのものだからです。わたしのために人々があなたがたをのしり、迫害し、ありもしないことで悪口を浴びせるとき、あなたがたは幸いです。喜びなさい。大いに喜びなさい。天においてあなたがたの報いは大きいのですから。あなたがたより前にいた預言者たちを、人々は同じように迫害したのです。 マタイの福音書 5章10-12節
  - 父の霊がともに語る (10:20)
    - ヨシュア 申命記34:9 エリシャ 2列王記2:9,15

### OpenAI o1

興味深い分析ですね。マタイ福音書4:18-11:1の大きな区分全体の中で、イエスの説教（山上の説教と弟子派遣の説教）とエリヤ・エリシャを想起させる奇跡物語が交互に配置され、最後にヨシュアを想起させる「弟子の派遣」が置かれるという見方は、マタイがイエスを旧約の重要な救済者たち（モーセ、エリヤ、エリシャ、ヨシュア）の型を総合した存在として描き出している、という聖書神学的な視点をよく表していると思います。以下、いくつか補足のポイントを挙げます。

## 1. 9:35-11:1 が「弟子を遣わす説教」として機能する構造

### 1) 9:35 と 4:23 の類似表現

マタイ福音書では「教え」「宣教」「癒やし」の三要素がまとまって提示される箇所 (4:23、9:35) がいわゆるインクルージオ (区分の始まりと終わりを示す枠) として機能すると言われています。

- 4:23: 「イエスはガリラヤ全地を巡って、会堂で教え、御国の福音を宣べ伝え、民の中のあらゆる病気を癒やされた」

- 9:35: 「イエスはすべての町と村を巡って、会堂で教え、御国の福音を宣べ伝え、あらゆる病気を癒やされた」

これらが5:1-9:34を一つのまとまり（山上の説教＋一連の奇跡）として結び、次に9:35から新しい段落が始まることを印象づけています。その中で10章は「弟子を遣わす説教（第二の大きな説教）」を形成し、11:1で一段落を閉じる構造です。

## 2) 11:1 の区切り（「イエスがこれらのことを弟子たちに命じ終えられると...」）

マタイでは長い説教・言葉のまとまりの終結部として「イエスがこれらの言葉を終えられると...」（ἐγένετο ὅτε ἐτέλεσεν ὁ Ἰησοῦς ...）という定型フレーズが五回出てきます（7:28, 11:1, 13:53, 19:1, 26:1）。このうち11:1は、山上の説教（5-7章）に次ぐ第二の説教（弟子派遣）を締めくくるフレーズとして読めるわけです。

---

## 2. 旧約の人物たちを想起させるイエス像

### 1) モーセ（山上の説教 4:18-7:29）

「山の上」で、トーラー（律法）の本質を教えるイエスは、しばしば「新しいモーセ」とされます。マタイはイエスの教えを「神の権威をもって律法の深みを提示するもの」として描くことで、出エジプト記のシナイ山で律法を与えたモーセになぞらえています（申命記18:15にある「あなたの同胞の中から、わたしのよ様な預言者を起こす」という預言とも結びつけられます）。

### 2) エリヤ・エリシャ（8:1-9:34 の奇跡物語）

マタイ8-9章では様々な奇跡物語が連続して描かれます。ユダヤの伝統で奇跡の預言者といえばエリヤとエリシャが思い起こされます。特に死者の蘇生（ルカの並行箇所などを含む）や多様な癒やしにおいてエリヤ、エリシャが想起されますが、マタイはエリヤ/エリシャのごとき力あるわざを行うイエスこそ、終わりの日に到来する真のメシアであると示唆しているように読めます。

### 3) ヨシュア（9:35-11:1 の弟子派遣）

分析で指摘されているように、マタイ10章には「恐れるな、強くあれ」という趣旨の語りが繰り返されます（10:19,26,28,31 などの“恐れるな”はギリシャ語で μη φοβεῖσθε）。これはヨシュア1章5-9を背景とする表現だと理解すると、ヨシュアがモーセの後継者として「カナン征服の使命」を受けたように、イエスによって「神の国の到来を告げる使命」を委託される弟子たちが“勇気をもって出ていく”イメージが浮かび上がります。

- ヨシュア1:5-9: 「強く雄々しくあれ...主あなたの神が共におられる...恐れてはならない」
- マタイ10:19-20: 「...何をどう言おうかと心配しなくてもよい。話すべきことはそのとき与えられる... 実は話すのはあなたがたではなく、あなたがたのうちにある父の霊である。」

また10章15節の「さばきの日」や10:23の「人の子が来る」など終末的な到来を見据えながら、いわば「新しい土地（世界）へと踏み出す」弟子たちを励ます構成になっていることも、ヨシュアの物語を投影していると考えられます。

---

### 3. 弟子派遣説教（10章）の内的構成

---

ご指摘のように、10章の説教は4つの小区分 (A-D) で読むことができます。区分の仕方は諸説ありますが、大枠としては以下の流れです。

#### 1. 10:5b-15 (A)

- 弟子の派遣の目的と「ふさわしい者」の家に入るように、という具体的指示。受け入れるか拒否するかで報いと裁きが起こる。

#### 2. 10:16-23 (B)

- 迫害や公会堂・総督・王たちの前に立たされる場面。「恐れるな。父の霊が語る」という励まし。将来の教会迫害を予告する面も強い。

#### 3. 10:24-33 (C)

- 弟子とその師との関係、また「体は殺しても魂を殺せない者を恐れるな」といった訓戒。神の支配に信頼せよという呼びかけ。

#### 4. 10:34-42 (D)

- 家族の対立や十字架の覚悟、「わたしのゆえに命を失う者はそれを得る」といった徹底的な献身の要求。最後は「預言者を受け入れる者には預言者の報い」という、“受け入れ”への報いで締めくくられる。

こうした区分で見ると、AとDが「ふさわしい（受け入れる）者への祝福や報い」を扱い、BとCが「迫害・恐れ・試練・しかし神が共にいる」という主題を扱う対比があると考えられます。お示しのように「ヨシュア1章の強い励まし」と結びつけると、より明確にストラクチャーが見えてきます。

---

### 4. マタイ5章の山上の説教との連関（塩と光、迫害の幸い）

---

「あなたがたは地の塩...世の光...」「義のために迫害されている者は幸い」（マタイ5:10-16）といった山上の説教の教えは、10章の派遣において現実化する道を示しています。特に「迫害を受けるが喜べ」というビジョンは、10章BとC（迫害・恐れるな）で具体的な教えとして再度繰り返されると言えます。さらに「受け入れられる家には平安を祈れ」「受け入れる者には報いがある」というAとDは、山上の説教が示す「世の光となる弟子の祝福」が、実際の宣教・客人としての往訪（host/guest 関係）でどう表れるかを具体化した部分とも言えるでしょう。

---

### 5. 「父の霊」による支えとヨシュア/エリシャの関係

---

マタイ10:20の「実は話すのはあなたがたではなく、あなたがたのうちにあって語っておられる父の霊である」という箇所を、旧約の後継者への霊の継承（ヨシュアへの按手、エリシャへの衣の継承）になぞらえる視点も示唆的です。とりわけ、

- 申命記34:9 「ヌンの子ヨシュアは、知恵の霊に満ちていた。モーセが彼の上に手を置いたからである。」
- 2列王記2:9,15 「あなたの霊の二つの分け前をいただきたい」「エリヤの霊がエリシャの上にとどまった」

といったテキストは、マタイ10章の「弟子たちにイエスの権威・力が授けられる」場面をオーバーラップさせるのにふさわしい箇所です。

---

## まとめ

- 大区分としては、マタイ4:18-11:1の大きな枠の中で、4:18-7:29（山上の説教）、8:1-9:34（奇跡物語）、9:35-11:1（弟子派遣の説教）という三部構成が見られます。
- 旧約の主要人物（モーセ、エリヤ・エリシャ、ヨシュア）を想起させる流れの中で、イエスが「律法の本質的権威を示す者」「奇跡の力をもつ預言者」「神の国の征服を導く新たな指導者」として総合的に描かれるのがマタイの特徴です。
- 10章の派遣説教は、実際に弟子たちが「山上の説教」の教えを行動に移す場面であり、その際に「迫害を恐れず」「ふさわしい者には平安が与えられる」という二面性が強調されます。ここに「ヨシュア 1:5-9」の“強くあれ、恐れてはならない”のテーマが明確に重ねられているのは非常に示唆的です。

したがって、提示されている構造分析は、マタイが旧約の諸要素をどのようにまとめ上げ、イエスをメシアとして描いているかを理解する上で大変有益だと思われます。また、山上の説教(マタイ5-7章)で語られた「塩と光」「迫害の幸い」が10章の派遣説教の現実的な指針となっている点や、「父の霊による導き」がヨシュアやエリヤ/エリシャの後継者モチーフと重ねられている点は、マタイの物語世界を多層的に結びつける興味深い視点です。

このように、「イエスの権威ある言葉と行い → その権威の委任 → 弟子たちが迫害下での宣教に招かれる」という流れが、旧約の救済史的モチーフ（モーセ、エリヤ・エリシャ、ヨシュア）を織り込みながら展開している、と理解できるのではないのでしょうか。分析で示されている構造は、マタイの大きな神学テーマを捉える上でよく整理されていると思います。

---

## B) 殺す、憎まれる、迫害に会う D) 剣、愛する、自分のいのちを捨てる

---

この組み合わせは「地の塩」

---

## A) 平和を宣言する C) 覆われることなく明るいで語る

---

この組み合わせは「世の光」

---

### OpenAI o1

ご指摘の「B) + D)=地の塩」「A) + C)=世の光」という視点は、マタイ5章13-16節（「地の塩」「世の光」）と10章B・D, A・Cのセットを対応させる興味深い分析だと思います。両面からざっと整理すると、次のような対応関係が見えてきます。

---

## 1. 「地の塩」に対応する B) と D) の内容

- B) 10:16-23
  - 迫害に遭う、殺される恐れ、嫌われる、という厳しい状況
  - しかし「恐れるな」「父の霊が語ってくださる」という励まし

- **D) 10:34-42**

- 「剣をもたらす」「わたしよりも自分の父や母を愛する者は...」「自分のいのちを得ようとする者は...」という徹底的献身の要求
- 結びは「預言者を受け入れる者は...義人を受け入れる者は...」と報いを語る

これらB)とD)で描かれるのは、いわば「外からの迫害や対立 (B) 」と「内面・家族関係における対立、自己犠牲 (D) 」の両面での“試練”です。ここで思い起こされるのが「あなたがたは地の塩です」(マタイ5:13) というイエスの言葉です。

## (1) 「塩」の役割：腐敗を食い止め、味をもたらす

「塩」はしばしば保存料・殺菌作用の象徴と言われますが、マタイ5章当時は「塩が味を失うなら...」という表現で「弟子が本来の使命を果たせなくなる」ことを警告する意味合いが強いです。迫害や内部対立が激化する中でも、“弟子としての本質的な姿”が失われないようにすることが重要になります。

- **B) 迫害の中でも福音を語り続ける (腐敗から守る)**

迫害する側は弟子を傷つけようとはしますが、弟子は「地の塩」として自分たちが墮落してしまわないように耐え、清さを保つ必要があります。

- **D) 親しい者や自分自身のいのちとの対立を覚悟する (味を保つ)**

一見きびしい命令ですが、「神への従順を最優先する姿勢」が「塩の塩け」であり、それを失うと「もはや何の役にも立たない」(マタイ5:13) という警告が重なってきます。

こうしてB)とD)は、「外からの圧力・内的な執着の試練にさらされながらも、腐敗せず本質を保ち続ける姿＝“地の塩”」を示す部分と捉えられるわけです。

---

## 2. 「世の光」に対応する A) と C) の内容

- **A) 10:5b-15**

- 弟子たちが「平和(シャローム)」を宣言し、受け入れる人々に福音を伝える
- 福音を拒む町・家には裁きが及ぶ(「ソドムとゴモラよりも...」) というメッセージ

- **C) 10:24-33**

- 覆われることのない真理を大胆に語り、「体を殺しても魂を殺せない者を恐れるな」
- 「人の前でわたしを認める者を、わたしも父の前で認める」と公に告白することの重要性

ここには「公に明るみに出して語る」(10:27)・「平和を宣言する」(10:13) という「光としての積極的な発信」のイメージが見えてきます。

## (1) 「光」の役割：暗いところを照らし、人々に真理を示す

マタイ5:14-16で語られる「あなたがたは世の光です」は、「人々がそれを見て父をあがめるように」と、弟子が公に善行を示す(隠さない)ことを強調します。A)とC)もそれに対応して、「隠さずに(迫害を恐れずに)語る」「平和の福音をもって人々に神の御国を見せる」という積極的宣教を描いています。

- **A) ふさわしい者に“シャローム”を告げる光**

弟子たちが町や家を回って平和を宣べ、受け入れる人に福音の恵みが届く。「世に光を届ける」働きの具体像といえます。

- C) 公に告白し、恐れずに主を認める光

「光をマスの下に隠すな」(5:15)と同様、「闇で言われたことを明るみで言え」(10:27)、「体を殺す者を恐れず、公にイエスを告白せよ」(10:28,32)という呼びかけ。これは「世の光」として表に立って輝く姿に重なります。

---

### 3. まとめ：山上の説教(5:13-16)と10章A・B・C・Dの組み合わせ

---

マタイ5:10-12の「迫害を受ける者の幸い」が、「あなたがたは地の塩」「あなたがたは世の光」(5:13-16)と並んでいるように、10章でも「迫害と困難への忍耐」と「公の場での福音宣教」がセットで展開されています。そこをさらに細分化すると：

- B)・D) = '塩' (迫害・自己犠牲を通して味を保つ)
- A)・C) = '光' (平和を宣言し、公に恐れず明るみに福音を語る)

という対応になります。実際、A)とC)は外部へ「明るく照らす」「積極的に語る」要素が色濃く、B)とD)は「自分たちの本質を失わないようにする」要素（迫害や内的試練への対応）が中心です。マタイ5章で「迫害」と「塩・光」がセットになっていることを踏まえると、この分析は自然な読みと言えそうです。

---

#### 補足：構造全体における意義

- マタイ10章は「弟子の派遣説教」であり、迫害・拒否・受容・報いといった観点が多面的に描かれます。そこに山上の説教（5-7章）の「塩と光」「迫害を受ける幸い」が現実化する道筋が示されるのです。
- とりわけ「迫害」と「公の明かし」の両面は、使徒言行録以降の初代教会の歩みを強く想起させ、マタイ10章が後の教会共同体にとってどのような指針として読まれていたかがうかがわれます。

以上のように、

**B) 殺す・憎まれる・迫害 ⇒ D) 剣・愛する・命を捨てる** が「地の塩」としての側面を示し、

**A) 平和を宣言 ⇒ C) 隠されずに明るみで語る** が「世の光」としての側面を示す、

という組み合わせは、山上の説教5:13-16の「塩」「光」を10章の詳細な区分と対比させた上での解釈として十分に説得力があります。マタイが5章と10章をどのように関連づけつつ弟子像を描いているかが、一層はっきりと浮かび上がる視点と言えるでしょう。

---

## USER

別の組み合わせで、B) C)は、義のために迫害を受ける者、A) D) 天の御国を相続する だと分析しました

### OpenAI o1

前回の「B)+D)=地の塩/A)+C)=世の光」という対応とは別の視点として、「B)+C)=義のために迫害される者/A)+D)=天の御国を相続する者」という組み合わせを提示するのは、マタイ5章の八つの幸い（特に最後の迫害に関する幸いと、天の御国を受け継ぐ幸い）との関連をよりはっきりさせる意図があるように思います。

---

# 1. B) C) が「義のために迫害を受ける者」に対応する視点

---

## B) 10:16-23

- 弟子は「狼の中の羊」のように迫害の危険にさらされる（10:16-17）。
- 公会堂や総督・王たちの前に引き出され、憎まれる（10:17-18,22）。
- 最後まで耐え忍ぶ（10:22）よう求められている。

## C) 10:24-33

- 弟子は師と同じ扱いを受ける（10:24-25）。
- 体を殺す者を恐れず、公に告白せよ（10:26-27,28-32）。
- 「あなたがたの髪の毛さえ数えられている」との慰めがある（10:30-31）。

これらB)とC)を通読すると、迫害や恐れとの戦いというテーマが中心にあると言えます。

- **B)** 具体的な外部迫害（殺される、捕らえられる、憎まれる）
- **C)** 迫害を恐れず公に語れという教え（「暗闇で言われたことを明るみで言え」）

マタイ5章10-12節の「義のために迫害される者は幸い」「わたしのために迫害されるとき喜べ」という言葉を、実際に弟子たちが体験する場面として位置づけられるわけです。

---

# 2. A) D) が「天の御国を相続する者」に対応する視点

---

## A) 10:5b-15

- 「行って、『天の御国が近づいた』と宣言しなさい」（10:7）。
- ふさわしい者には平安が与えられ、その家に留まる（10:11-13）。
- 拒絶する町には神の裁きが及ぶ（10:14-15）。

ここは“天の御国”の到来がはっきり言及され、これに応答する「ふさわしい」人々には祝福があることが前面に出ています。

## D) 10:34-42

- 「剣をもたらず」（10:34）とあるように、一見激しい対立が語られますが、その根底には「真にイエスに従う者は報いを得る」というテーマがある。
- 結びの 10:40-42 では、イエスを受け入れる者・預言者を受け入れる者・義人を受け入れる者は「報い」を受けると告げられる。

特に D) は、「イエスを受け入れること」が父の御前で報い（すなわち最終的には「神の国」での祝福）につながると読めます。また A) における「御国の到来を宣べる宣教」と組み合わせれば、**A) は「御国が近づいた」福音宣教、D) は「イエスと福音を受け入れる人の報い」という流れで、「天の御国を相続する」要素が前後で補完し合っている構造です。**

---

### 3. マタイ5章の「迫害される者は幸い」「天の御国は...」への対応

---

マタイ5章3節と10節で繰り返される「天の御国はその人たちのもの」という表現が印象的です。

- 5:3 「心の貧しい者は幸いです。天の御国はその人たちのものだから。」
- 5:10 「義のために迫害されている者は幸いです。天の御国はその人たちのものだから。」

これら二つの幸いに特にフォーカスすれば、

- 「義のために迫害される (5:10-12)」が B) C) と結びつく。
- 「天の御国はその人たちのもの (5:3,10)」が A) D) の「御国を宣言し、報いを受ける」場面に結びつく。

こうした見方に立つと、マタイ10章のA, B, C, Dそれぞれに5章の幸いが具現化しているが、特に「義のための迫害 (B, C)」と「御国を受け継ぐ (A, D)」という二軸で整理すると、より分かりやすくなるわけです。

---

### 4. まとめ

---

先の「B)+D)=地の塩 / A)+C)=世の光」という見方では、「迫害下で腐敗を防ぎつつ (塩)、明るみに出して福音を語る (光)」という対応関係が明確に示されました。一方、「B)+C)=義のために迫害される者 / A)+D)=天の御国を相続する者」という見方では、マタイ5章の冒頭と末尾の幸い (特に5:3,10-12) を鍵として、

- **B, C**が「迫害下でも義を守り抜く態度」
- **A, D**が「神の国を宣言・受け入れ、最終的に報いを受ける」という構図になります。

両方の視点はそれぞれ補い合うものであり、マタイ5-7章 (山上の説教) と10章 (弟子派遣説教) の関係を多面的に示してくれます。マタイ福音書において、イエスの言葉 (教え) と弟子たちの実践 (派遣) がどのように対応しているかを探る上で、いずれの組み合わせも興味深い示唆を与えるでしょう。

**段落分けのしるしのひとつとして、A) B) D)の最後に「まことに、言います」と書かれています。C)にありませんが。**

---

#### OpenAI o1

興味深い観察です。マタイ10章の弟子派遣説教(A~D)において、「まことに、あなたがたに言います (アーメン・レゴー・ヒューミン ἀμὴν λέγω ὑμῖν)」がA, B, Dの最後に置かれているのに対し、Cの最後 (10:33) には見られない、という点は、マタイ福音書の編集構造を考える上でも重要な手がかりになります。

---

### 1. マタイ福音書における「まことに、あなたがたに言います」の用法

---

「まことに、あなたがたに言います (アーメン・レゴー・ヒューミン)」は、イエスの言葉を際立たせる特色ある表現として、マタイ福音書のあちこちで繰り返されます。しばしば、



1. ある段落や小見出しの結論・締めくくりとして機能する
2. または特に強調したい主題を提示する際に用いられる

という二つの役割を持つことが多いと言われます。マタイ10章の弟子派遣説教（10:5b-42）を区分するとき、このフレーズが小区分の終結で用いられていることは、まさにマタイの編集意図を示す「構造のしるし」と言えるでしょう。

---

## 2. 10章の区分と「まことに、言います」が現れる箇所

---

一般的に次のように四つの小区分が想定されるとき、それぞれの区分の末尾に「まことに、言います」があるかどうかを確認すると、はっきりとしたパターンが見えます。

1. **A) 10:5b-15**
  - 結論部 10:15 に「まことに、あなたがたに言います」(ἀμὴν λέγω ὑμῖν)
2. **B) 10:16-23**
  - 結論部 10:23 に「まことに、あなたがたに言います」(ἀμὴν γὰρ λέγω ὑμῖν)
3. **C) 10:24-33**
  - 結論部(10:33)に「まことに、あなたがたに言います」がない
4. **D) 10:34-42**
  - 結論部 10:42 に「まことに、あなたがたに言います」(ἀμὴν λέγω ὑμῖν)

ご覧のとおり、A, B, D の最後には揃ってこの定型句がありますが、C だけには出てこないのです。

---

## 3. C区分(10:24-33)に「まことに、言います」がない理由・背景

---

### (1) 構造的な役割の違い

A, B, D の終わりでイエスが「まことに、言います」と締めくくるのは、読者・聞き手に対して、そこまで語られた内容に特別な結論や宣告（報い・裁きなど）を提示するための境界マーカードと考えられます。

- **A (10:5b-15)**
  - 平和を宣言するも受け入れられない町には「ソドムとゴモラよりも耐えやすい」と、裁きを宣告する文脈で「まことに、言います」を用いる（10:15）。
- **B (10:16-23)**
  - 迫害の中で福音を語る弟子たちに対して、「まことに言います。イスラエルの町々を回り終えないうちに人の子が来る」（10:23）。未来の到来（終末的視点）を断言する構造。
- **D (10:34-42)**
  - 家族の対立と徹底的献身、そして「受け入れる者には報いがある」という締めくくりで、「まことに言います。その人は決して報いを失うことはない」（10:42）と結んでいる。

一方で **C (10:24-33)** は、

- 師と弟子の関係の確認 (10:24-25)
- 「恐れるな」「覆われていることは表に出る」(10:26-28)
- 父なる神の摂理と保護 (10:29-31)
- 「人の前でわたしを認める者は、わたしも父の前で認める」(10:32-33)

という流れで、迫害に直面する弟子たちへ「恐れなく大胆に語れ」「神を深く信頼せよ」という励ましが続かれています。そこにははっきりとした裁きや報いの結論というより、「証し・告白とその結果」が提示される構造です。ここで「まことに、言います」という強調句が付されていないのは、段落の結論・宣告というよりも“弟子とイエスの関係”および“神への信頼”を中心とした勧めで終わっているからだと考えられます。

## (2) B～Cにまたがる「迫害」のテーマ

もう一つの見方として、B(10:16-23)とC(10:24-33)は、ともに「迫害」が続く流れであり、ひと続きの場面とも捉えられます。

- B) 具体的な外部迫害と裁判・憎まれる弟子
- C) 迫害に際し「恐れるな」と繰り返す励まし

B)の終わり(10:23)に「まことに、言います」が入り、C)の終わりには入っていないのは、「迫害」をめぐる二つのブロックが大きく区切られる境界をB)に設定しつつ、C)はその流れをもう少し広げて具体的な「恐れなく語る姿勢」を示して締める形を取った可能性があります。

## 4. 「段落分けのしるし」としての意義

このように「まことに、言います」(ἀμὴν λέγω ὑμῖν)は、マタイが意図的にブロック(小区分)の締めくくりに入れる場合が多く、読者に「ここで一つの大きな結論・宣言が出ていますよ」というサインを与える働きをしています。Cだけにはないのは、むしろ「Cが段落として独立した結論を下していない(あるいはB-Cで一つの流れを形成している)」、あるいは「Cの役割が宣告というより勧めや慰めの言葉に重点があるため、特別な宣言・断言形を置かなかった」などと推察できます。

## まとめ

- マタイ10章のA, B, Dの終わりにだけ「まことに、あなたがたに言います」という句が現れるのは、マタイがそれらのブロックを「神の裁きの宣告」「終末への断言」「報いの宣言」といった“強調すべき結論”で締めくくっている証拠といえます。
- C区分(10:24-33)は「恐れなく語れ」「師であるイエスを公に認めなさい」という励まし中心の段落であるため、そこでは結論としての“宣言句”を置かずに終わっています。
- したがって「まことに、言います」はマタイの中でしばしば区分のしるしとして使われており、10章でもA, B, Dの締めくくりに示す「編集上のマーカー」としての役割を果たしていると考えられます。

**Mtt 10:5-6** 「異邦人の道に行くな。またサマリヤ人の町にはいるな。むしろ、イスラエルの家の失われた羊のところに行け。」は、「**1Pe 4:17** さばきが神の家から始められる時がきた。」を連想する。そして復活後には、「**Mtt 28:19** それゆえに、あなたがたは行って、すべての国民を弟子とし」となり、御霊が与えられると「**Act 1:8** ただ、聖霊があなたがたにくる時、あなたがたは力を受けて、エルサレム、ユダヤとサマリヤの全土、さらに地のはてまで、わたしの証人となるであろう。」と発展していく。そのはじまりが**10章**。

## OpenAI o1

マタイ10章の弟子派遣では、「イスラエルの家の失われた羊のところへ行け」（10:5-6）と命じられ、異邦人やサマリヤ人のもとには行かないように指示されています。一方、復活後のイエスは「すべての国民を弟子とし」（マタイ28:19）、使徒の働きでは「エルサレム、ユダヤとサマリヤの全土、さらに地の果てまで」（使徒1:8）宣教が拡大していく流れが示されます。この対比は、マタイ福音書の文脈と新約全体の神学的展開を考える上で重要なポイントです。

## 1. 「まずイスラエルへ」——マタイ10章の位置づけ

### (1) イスラエルを中心とした宣教命令

マタイ10章は、イエスが初めて弟子たちを派遣して宣教させる場面です（10:5b-42）。ここで弟子たちは「イスラエルの家の失われた羊のところに行け。異邦人の道に行くな。またサマリヤ人の町には入るな。」と命じられます（10:5-6）。マタイ福音書の物語上、イエスご自身の宣教活動もまずガリラヤ地方やユダヤ人社会にフォーカスしており、弟子たちにも同様の限定的な指示が与えられています。

### (2) 1ペテロ4:17 「さばきが神の家から始まる」

この指示が「1ペテロ4:17『さばきが神の家から始まる』」を想起させる、という視点は示唆に富みます。旧約においても、まず「神の民」とされたイスラエルが神の裁きや恵みを先に受け、そこから周囲の国々へと広がる、という構図がしばしば見られます（エゼキエル9章など参照）。マタイ福音書では“神の国の到来”を最初にイスラエルへ告知し、イスラエルがどう応答するかが焦点となるのです。

## 2. 復活後の普遍的宣教へ——「すべての国民を弟子とし」（マタイ28:19）

### (1) マタイ28:19での大宣教命令

マタイ福音書の終盤では、復活したイエスが「すべての国民を弟子とし、父・子・聖霊の名によってバプテスマを受け、わたしが命じたすべてのことを守るように教えなさい」と命じます（28:19-20）。つまり、イエスの地上での宣教活動と初期の弟子派遣（マタイ10章）では“まずイスラエルへの宣言”が優先されましたが、復活を経て「全世界（万民）への福音宣教」へと使命が拡大・完成されるわけです。

## (2) 使徒1:8 「エルサレム、ユダヤ、サマリヤ、地の果てまで」

使徒の働き1:8では、イエスの昇天直前の言葉として、「聖霊を受けた弟子たちが、エルサレムから始まり、ユダヤ全土、サマリヤへ、さらに地のはてまで」広がっていくことが示されます。そこにはマタイ28章と同様、地理的にも民族的にも宣教領域が拡大していく大きな筋書きがあります。

## 3. マタイ10章が「はじまり」として果たす役割

### (1) 弟子が「派遣」される最初のステップ

マタイ10章は、イエスが弟子たちを宣教者として初めて公式に「送り出す（派遣する）」場面です。

- これまではイエスが教え、癒し、悪霊追い出しといった“権威あるわざ”を行う中心でした。
- しかし10章から、弟子たちが「イエスの権威を授けられ」（10:1）で、自分自身が福音を宣べ、病を癒す働きに加わります。

これは「神の家＝イスラエル」への審判的なメッセージ（悔い改めの呼びかけ）でもあり、同時にイエスの救いが人間社会のただ中に入り込んでいく最初の幕開けと言えます。

### (2) イエスの死と復活後に開かれる普遍的ビジョン

いったんはイスラエルの家に限定されるものの、福音書全体を通して「ご自分の民に拒絶されるメシア」という流れがあり、十字架と復活後に世界的規模での救いが明確に示されます。ここで10章に登場する

- 「神の国は近づいた」（10:7）
- 「迫害と拒否を受けるが、最後まで耐え忍ぶように」（10:16-23）といった内容は、のちにイスラエルを越えて異邦人世界でも実現していくことになります。

## 4. まとめ

- **マタイ10章**は、イエスが弟子を派遣する最初の始動点として「イスラエルを失われた羊」に向かう限定的な宣教が描かれます。ここには「神の家（イスラエル）からまず審判や救いが始まる」という旧約的・ユダヤ的な枠組があり、1ペテロ4:17との関連を想起させます。
- しかしそれは最終目標ではなく、**復活後（マタイ28:19）**に「すべての国民を弟子としなさい」という大宣教命令へと拡大し、さらに**使徒1:8**で具体的に「エルサレム→ユダヤ→サマリヤ→地の果て」という段階的な広がりを示す流れが開かれます。
- したがって、マタイ10章の派遣は「まずイスラエルを悔い改めに招き、神の裁きと救いを告げる」神学的・歴史的起点であり、その後の普遍的宣教に向かう第一歩という位置づけになるわけです。

このように、マタイ10章を「神の家（イスラエル）への最初の宣教のはじまり」として捉え、それが「すべての国民へ」と発展していく一連の流れを見ると、マタイ福音書と使徒の働き、さらに1ペテロ書など新約全体に通じる救済史の大きな筋が明確に浮かび上がってきます。

## アブラハムに約束されたことの成就である

「あなたは国を出て、親族に別れ、父の家を離れ、わたしが示す地に行きなさい。わたしはあなたを大いなる国民とし、あなたを祝福し、あなたの名を大きくしよう。あなたは祝福の基となるであろう。あなたを祝福する者をわたしは祝福し、あなたをのろう者をわたしはのろう。地のすべてのやからは、あなたによって祝福される」。「あなたは国を出て、親族に別れ、父の家を離れ」はD)「あなたを祝福する者をわたしは祝福し、あなたをのろう者をわたしはのろう。」はA)

## OpenAI o1

アブラハムへの約束(創世記12:1-3)とマタイ10章の派遣説教を対比する視点は、マタイ福音書が旧約聖書の救済史的な文脈の上にイエスの宣教と弟子たちの働きを位置づけていることを改めて浮き彫りにします。特に、

- 「あなたは国を出て、親族に別れ、父の家を離れ...」(創12:1)

と、マタイ10章D区分(たとえば「父や母よりもわたしを愛する者は...」「自分のいのちを得ようとする者は...」10:37-39)との響き合い。

- 旧約におけるアブラハムは、自分の出身地や家族・親族の保護圏を出るように召されました。マタイ10章D区分も、家族よりも神への従順を優先せよという徹底的な献身を説いています。家族的な絆さえも越え、神の使命を選ぶという構図がアブラハムの召命を想起させます。

- 「あなたを祝福する者をわたしは祝福し、あなたをのろう者をわたしはのろう」(創12:3)

と、マタイ10章A区分(「ふさわしい家には平安が来る...受け入れられない町には裁き」10:11-15)との対応。

- 弟子たちが訪問する家・町が「受け入れる(祝福する)」か「拒否する(呪う)」かによって、その家・町に祝福あるいは裁きが及ぶ、という構図です。これはアブラハム契約にある「祝福する者には祝福、拒む者には呪い」という原則が引き継がれているかのように読めます。

こうした対比から、**マタイ10章における宣教は、アブラハムに与えられた約束の成就の一端として描かれている**と言えます。すなわち、アブラハムが「家を出る」ことで神の祝福の源泉となり、最終的に「地上のすべてのやからが祝福される」(創12:3)という大きなビジョンが、イエスと弟子たちの派遣に重ね合わせて展開しているわけです。

マタイ福音書の冒頭(1:1)が「アブラハムの子ダビデの子、イエス・キリストの系図」と始まるように、マタイは「アブラハム契約 → ダビデ契約 → メシア到来」という大きな流れを意識的に描いています。10章の弟子派遣も、まずイスラエルの家に「神の国が近づいた」と告げ(A区分)、そこでの受け入れ・拒否がアブラハム契約の「祝福/呪い」の構造を再確認させる。そして、D区分ではイエスに従う者が家族や自己の命さえも捨てねばならない、まさにアブラハムのような信仰的踏み出しを求められる...。こうした文脈を踏まえると、マタイ10章はアブラハム契約がイエスを通して「宣教」として実現へと動き始める一つの転換点と捉えることができます。

最終的には、マタイ28:19「すべての国民を弟子としなさい」によってアブラハム契約の「地のすべてのやからがあなたによって祝福される」(創12:3)が全地・異邦人へと広がる形で具体化されていくわけです。こうして新約全体を通して、アブラハムに始まる救済史的な約束がイエスとその弟子たちの宣教へと受け継がれ、最終的に全民族への福音宣教に発展する大きな流れが、マタイ10章にもすでに示唆されていると考えられます。

**マタイ10章について、今までの議論に基づいて文章にまとめたい。**

---

## OpenAI o1

以下はこれまでの議論を踏まえてまとめた、マタイ10章の概要と神学的意義です。マタイ福音書における文脈、旧約との関連、そして山上の説教(マタイ5-7章)とのつながりなどを整理しています。

## 1. マタイ10章の位置づけ: 4:18-11:1 の中で

マタイ福音書4:18-11:1は「イエスの権威ある教えと力あるわざ」を中心に構成されています。その内訳は、大まかに次のように整理できます。

1. **4:18-7:29**: 山上の説教（モーセを想起させる権威ある教え）
2. **8:1-9:34**: エリヤ・エリシャを想起させる奇跡のわざの連続
3. **9:35-11:1**: 弟子たちを派遣する説教（ヨシュアを想起させる“強くあれ、恐れるな”の励ましを含む）

このうち10章は、9:35から始まる「弟子の派遣説教」の中心部として位置づけられます。イエスが弟子たちを“はじめて公式に遣わす”重要な場面です。

## 2. マタイ10章の内的構成 (A-B-C-D)

通常マタイ10章の説教は4つの小区分に整理されることが多く、各ブロックは以下の内容を扱っています。

### 1. A) 10:5b-15

- 「イスラエルの家の失われた羊」のもとへ行き、「天の御国が近づいた」と宣言せよ (10:7)。
- 受け入れられる家・町には平安を与え、拒む町には裁きが及ぶ (10:13-15)。

### 2. B) 10:16-23

- 「狼の中の羊」のように迫害にさらされる弟子たち：捕らえられ、憎まれ、殺される危険。
- それでも「恐れるな。父の霊があなたがたを語らせてくださる」 (10:19-20) と励まされる。
- 「最後まで耐え忍ぶ者は救われる」「イスラエルの町々を回り終えないうちに、人の子が来る」 (10:22-23) など、終末的な視点が含意される。

### 3. C) 10:24-33

- 「弟子は師にまざるものではない」 (10:24-25)
- 迫害の中でも「体を殺しても魂を殺せない者を恐れるな」「暗闇で言われたことを明るみで言え」という大胆な告白と宣教が促される (10:26-31)。
- 「人の前でわたしを認める者を、わたしも父の前で認める」 (10:32-33)

### 4. D) 10:34-42

- 家族間の対立さえ引き起こすイエスの使命。「わたしよりも父や母を愛する者はわたしにふさわしくない」「自分のいのちを得ようとする者はそれを失う」 (10:37-39)
- 最後は「預言者を受け入れる者は預言者の報いを受け...小さい者に冷たい水一杯でも与える者は、決して報いを失うことはない」として締めくくられる (10:40-42)。

特徴的なのは、A, B, Dの終わりに「まことに、あなたがたに言います」(ἀμὴν λέγω ὑμῖν)が挿入されており、これが各区分の結論を示す印象的なマーカーとなっています。一方C区分にはその定型句が見られません。

---

### 3. 山上の説教との連関: 「塩と光」「迫害される幸い」

---

マタイ5:10-16の山上の説教にある「義のために迫害される者は幸い」「あなたがたは地の塩・世の光」とのつながりが、10章でも多角的に表現されています。

- **迫害 (B, C):** 「狼の中の羊」「殺される・憎まれる」「恐れるな・公に告白せよ」などが5:10-12(迫害される幸い)を具体化する。
- **宣教と受容 (A, D):** 「受け入れる者への平安や報い」「拒む者への裁き」という構図は、5:13-16「塩味を失わない」「光を隠さない」のイメージをさらに発展させ、実地の宣教場面に当てはめている。

また、

- A+Cを「光」と捉え、積極的に明るみに出て宣言する面を強調する、
- B+Dを「塩」と捉え、迫害に耐えつつ腐敗を防ぐ弟子の姿と見る、あるいは
- B+Cを「義のために迫害される者」とし、
- A+Dを「天の御国を相続する者」とする、  
など、さまざまな対応の仕方が提案されてきました。いずれにしても山上の説教と10章の弟子派遣説教が緊密につながっているのがマタイの特徴です。

---

### 4. 旧約の人物との重なり: モーセ、エリヤ/エリシャ、ヨシュア、そしてアブラハム

---

#### (1) モーセ (山上の説教)

- イエスが「山の上」で律法の本質を教える姿はモーセを思い起こさせる。
- 「新しい律法の授与」と見なされる構図。

#### (2) エリヤ/エリシャ (8-9章の奇跡)

- 死者の蘇生や病の癒やしなど、旧約最大の奇跡預言者を想起させる。
- 8-9章の続けざまの奇跡は「力あるわざによる権威」を強調。

#### (3) ヨシュア (10章の「強くあれ、恐れるな」)

- 10章には「恐れるな」「雄々しくあれ」という命令が繰り返される(10:19,26,28,31など)。
- ヨシュア1章5-9の「強くあれ。恐れるな。主が共におられる」を反映していると考えられる。
- イエスの命令を受けた弟子たちが、あたかも「新しい地に踏み込む」ように派遣される構図。

#### (4) アブラハム (創12:1-3)

- 創世記12:1「あなたは国を出て、親族に別れ、父の家を離れ...」は、マタイ10章Dの「わたしより父母を愛する者は...」「自分のいのちを捨てる...」に通じる。
- 創12:3「あなたを祝福する者をわたしは祝福し、あなたをのろう者をのろう...」は、10章A「受け入れる者には平安が与えられ、拒む町には裁きが及ぶ」と対応。
- こうしてアブラハム契約の「地上のすべてのやからはあなたによって祝福される」という約束が、イエスと弟子たちの宣教において部分的に実現へ動き出す。

---

## 5. まずはイスラエル、そして全世界へ

マタイ10:5-6では「異邦人の道に行くな。サマリヤ人の町に入るな。むしろイスラエルの家の失われた羊のもとへ行け」と厳格に範囲を絞ります。これは旧約の「さばきはまず神の家（イスラエル）から始まる」（1ペテロ4:17）という図式に重なります。しかし、マタイ福音書の終わり（28:19）では「すべての国民を弟子とせよ」と普遍的宣教へ拡大し、さらに使徒言行録1:8では「エルサレム、ユダヤとサマリヤの全土、地の果てまで」と進展していきます。

- **10章**は「まずイスラエルへ」という初期段階の派遣。
- しかしそれはやがて復活後の大宣教命令（28:19）に結ばれ、アブラハム契約「地のすべてのやからが祝福される」（創12:3）へとつながる大いなる始動点と位置づけられます。

---

## 6. まとめ

- **マタイ10章**は、イエスが弟子たちを初めて公に宣教者として送り出す場面であり、4つの小区分（A, B, C, D）の構成や「まことに、言います」の繰り返しによって、神の国の到来を告げる宣教のあり方が多面的に語られます。
- そこには、**山上の説教(5-7章)**との明確な対応（「塩と光」「迫害される幸い」など）が見られ、**旧約の重要人物（モーセ、エリヤ/エリシャ、ヨシュア、さらにアブラハム）の型**が重ね合わされることで、イエスがもたらす救いの歴史的・神学的重みが示されています。
- 10章では「まず神の家イスラエル」へ向かう限定された派遣が語られますが、**復活後には「すべての国民」へと宣教が拡大**し、アブラハムの契約が最終的に異邦人にも及ぶ筋書きがマタイ福音書全体（そして使徒言行録）で明確にされていきます。

このように、マタイ10章は「旧約の約束とイエスにおける成就」「山上の説教の具体化」「弟子たちの派遣の初歩段階、そして全世界へ広がる福音宣教への入り口」という複数の視点から読むことで、マタイの神学的狙いを豊かに汲み取ることができるのです。